岡道男先生に心から感謝をこめて

西村賀子

3月4日の夕方にかかってきた電話が中務先生の奥様からだとわかった瞬間、それが訃報であろうことはたちまち察せられました。けれどもこれほど悲しい訃報に接したのは、義母のとき以来のことでした。受話器を置くなりあふれ始めた涙を押しとどめることはできず、後悔の念が波のように胸にわきあがってくるばかりでした。

「あなたもようやくいい仕事ができるようになりましたね」と、いつか岡先生にほめていただくのが夢のまた夢でした。しかしその夢がかなう日はもう永遠に訪れなくなってしまったのです。先生に少しでも喜んでいただきたいと、ずっとずっと精一杯がんばってきたつもりです。でも、とうとう間に合いませんでした。

岡先生には、学生時代にオウィディウスの『変身物語』やトゥキュディデスをほとんど一対一でご指導いただきました。4月には3、4人出席していたはずの演習も、夏休みが明けると受講生は私だけになっていました。とくにトゥキュディデスの演習では、1回の授業でOCTを8ページも進まれる上、他に学生がいないので、毎週出席するのはとてもたいへんでした。ぴったりの訳語を求めてあの重いリドルースコットをあちこちひっくり返しては丹念に読み、同時に英和辞典も引かなければならず、さらに、すらすら訳せるように単語帳と首っ引きでテクストを2、3度読み返しておかなければなりませんでした。演習1回分の予習をするのに丸2日半ないととても追いつかない状態でした。予習が大変だったので、「来週は休講になるといいのになあ」とよく思ったものです。

必死の思いで下調べをし、「今日こそ間違いがなければよいのだが」という思いで授業に臨んでも、「そのように読めないこともないかもしれませんが、やはりこのように理解すべきでしょう」と先生から丁重に指摘されることもたびたびでした。私のテクストの読み方や解釈が間違っていても先生はいつも穏やかでしたが、訂正はきっぱりとなさるのがつねでした。そういうときの先生のご表情は、いつも微苦笑でした。私の間違いが突拍子もないひどいものだっ

たので、先生はにが笑いなさるしかなかったのでしょう。

正直なところ、学生時代の私はずっと先生を恐れ、びくびくしていました。いつも自分の力不足に悩んでいたので、あまりに低い私の語学力や教養のほどに先生はきっと内心あきれかえっていらっしゃるに違いないと思っていました。そんな気持ちは大学院修了後も続きました。私にとって岡先生は学問的にも人格的にもはるか高みにいらっしゃる方で、ただただご尊敬申し上げるばかりで、気軽にお話しするようなことはとうていできませんでした。いつのまにか馬齢を重ねたのちも、岡先生の前に出ると気分はあいかわらず演習の時間の延長でした。研究会や学会で先生にお目にかかっても、寡黙な先生の前では会話もすぐに途切れがちでした。もういい歳になったのだから若い頃のようにつまらないことを言って先生の微苦笑をお誘いしてはならないと、過度に緊張するあまり、先生の前ではどうしてもこちらも口数が少なくならざるをえませんでした。今にして思えば、もっと勇気を出して先生とお話しして、先生の汲めども尽きぬ豊かなご学識から得られるものを得ておくべきだったと後悔するばかりです。

浅学非才とはいえ私が今日まで西洋古典の研究を曲がりなりにも続けてくることができたのは、ひとえに岡先生のおかげです。紆余曲折の末、専攻学科を西洋古典に決めたのは2回生の最後ぎりぎりになってからでした。そのため、3回生になってから水野先生のラテン語もギリシア語4時間コースも同時に履修しなければなりませんでした。スタートからつまずいてしまったこともあって、とほうもない劣等感に終始さいなまれ続けました。がんばってともかく4年で卒業だけはしたものの、大学院入試では力不足でした。ちょうどオイル・ショックが重なったこともあって就職募集も少なく、また当時は、「男子に限る」という条件が募集要領に堂々と、しかもほぼすべての募集に明記されていた時代でした。企業への就職の道もなく、将来への不安とコンプレックスでいっぱいでした。

研究者になりたいという高校時代からの夢を断念できず、さりとて大学院への門を開くこともかなわず、教職免許も取得していなかったので、未来は真っ暗でした。思い余って先生にご相談に伺うと、夏休みにいっしょになにか読みましょうと先生はおっしゃってくださいました。アンティポンの弁論を先生のご自宅で何度かいっしょに読んでいただきました。何度お伺いしたのかはもう記憶にないのですが、一通り勉強が終ると、先生の奥様がいつも冷たい飲み物

とおいしいお菓子や果物を出してくださったことだけははっきりと覚えています。

ただでさえお忙しい先生の貴重な夏休みの研究のお時間を奪ってしまって、私は先生に大変申し訳ない気持ちでいっぱいでした。そのことを申し上げると、先生はお礼をお受け取りになることもなく、「津田さんが院入試に合格することが私に対する感謝の表現です」というようなことを、あっけないほどさらっとおっしゃいました。先生のご好意にお答えするためには、どんなことがあっても大学院に入って研究者の道に進まなければならない、それが私にできる先生へのただ一つのお礼なのだと、心に誓いました。

当時、文学部はある女子学生が大学院進学にあたって指導教官から「女の子は大学院にいっても就職がないし、早く結婚でもしなさい」と言われたというような事件で揺れていました。この事件のことはよく知りませんが、この発言に端的に表われているような女性差別は、70年代後半にはごく普通のことでした。私自身も父から「女の子なのに大学院まで行って勉強することはない」と、進学には反対されました。けれども岡先生は、当時の通念とはまったく逆の励ましと学恩を与えてくださったのです。

あの夏休みに先生のお宅に通ってご指導を受けていなかったら、私はまたもや院入試に失敗し、敗北感に打ちひしがれたまま、今なお失意の人生を送っていたかもしれません。そう思うと、岡先生には手塩にかけて育てていただいた、今日あるのは先生のおかげだと、ただただ感謝の念で胸が熱くなるばかりです。

先生のご指導と暖かい励ましはその後も続きました。『ギリシア悲劇全集』の翻訳をしていたとき、監修責任者の岡先生は私の最初の訳文を赤鉛筆で丁寧にいっぱい訂正してくださいました。最初のページの冒頭には、「10年かかってもいいから、本当にいい訳を出しましょう」という先生のコメントが付されていました。この仕事をこなすだけの力量がまだ私にないことを先生ははっきりと見抜いておられたのです。けれどもこの困難な仕事を通して研究者として成長してほしいという期待をこめて、先生は私にこれを与え、ご指導もしてくださったのだと思います。そして先生はそんな思いをこのような穏やかで控えめな言葉でしか表現なさらない、思いやりの深い方でした。

授業や会話を通して、また数多くのご論文によって、岡先生が私たちに伝えようとなさった最も大切なことは、テクストを正確に丹念に読むということだ

と思います。テクストを過不足なくきちんと読み、原典に忠実であるという鉄則を守ることは西洋古典学の、そして文献学の本来の姿です。それはまた、松平千秋先生以来の研究室の伝統ともなっています。この一番だいじなことを先生は自ら実践され、私たちに教えてもくださいました。けれども、先生の教えを私はどれだけ真摯に受けとめ、身につけたのかと自問すると、甚だ心許なく、内心忸怩たる思いがします。

残された者にできることは、先生の学問への深い愛を継承し、先生の教えを守って研究に専念するとともに、古典の価値を若い世代の人々に伝えていくことだと信じます。どこまでそれができるのか、先生のあまりに高いご業績を仰ぐとき、身がすくむ思いがします。「先生、どうか、不肖の弟子ではありますが、じっと見守り、励ましてください」と祈るほかありません。

いつか「今度の論文はよくできていましたね」というお言葉を先生からいただくことが、頂戴した多大な学恩に報いることだとずっと思ってきました。先生がどんなに長生きしておられても、先生からお褒めに与かるような日は来なかったかもしれません。けれども、今となっては、私がこれからどんなにがんばってみても先生に喜んでいただけることはもうかないません。それがせつなく悲しく、先生に対して申し訳ない思いでいっぱいです。ご存命中に岡先生に直接十分にはお伝えできなかった感謝の念をせめて今ご霊前に捧げ、心からご冥福をお祈りいたします。合掌。